

読み聞かせ講座 大きい子向け 読みなおすベーシック絵本 子ども読書活動交流集会（実技編）

講師：大井 むつみ（東京家政大学）

この講座は、もう一度聞き手になってベーシック絵本を楽しみ、味わうことで読みつがれてきた絵本を見直す機会とした。以下、読み聞かせをした絵本と講義の内容を記録する。

●『まのいいりょうし』瀬田貞二／再話 赤羽末吉／画 福音館書店 1973 （読み手：そよかぜ文庫）



・大変調子のよい絵本である。こんなことがあったらいいな！と思う。あと味がいい絵本で、喜ばれる。

・ベーシック絵本を楽しみ、どこに力があるか、何が力か探る。そして、選び取る目を養う。読み手は何を読むかに、8割の力を傾けること。絵を読み、テキストを見極める。これが基本である。

●『かさじぞう』瀬田貞二／再話 赤羽末吉／画 福音館書店 1966 （読み手：県立図書館職員）

・昔話は読み手が、初心者・ベテランどちらでも大丈夫である。迷ったら、すぐれた昔話絵本を読めば失敗はしない。ストーリーの強さが違う。昔話は幼児のもの、大きい子には長いお話と堅く考えない。

・子どもの文学には「生きていくっていいものだ。大きくなるって素敵なことだ。」のメッセージがある。昔話にも同様なものが多い。昔話では、弱いものや動物に意地悪をした人は幸福にならない。世界中の昔話を読み、たくさんの主人公や登場人物、いろいろなできごとや不思議に出会い、楽しんでほしい。

・『かさじぞう』松谷みよ子/作 黒井健/絵 童心社 2006

これは話が長く、余計なものが多い。絵が貧しそうではなく、綺麗過ぎて、雰囲気欠ける。福音館書店刊の赤羽末吉の絵は、余計なものを省き、描き過ぎていない。よく練られた日本語、吟味された文章である。目を閉じて聞くと、風景が浮かんでくるようである。

・絵本には余計なサービス、ストーリーに関係ないセリフはいらない。そして、どんな絵本もすんなり読むのが一番。声色や芝居っ気などは不要である。

●『ねむりひめ』ホフマン/え 瀬田貞二／訳 福音館書店 1963

（読み手：そよかぜ文庫）

・どのように場面が展開するか、丁寧に見て、読んでほしい一冊。抑えた色、雰囲気、美しい抑制のある、地味な絵本であるが、聞き手を引きつける力は大きい。瀬田貞二著「絵本論」も読んで欲しい。

●『なんでもみえる鏡』フィツォフスキ／再話 内田莉莎子／訳 スズキコージ／画 福音館書店 1989（読み手：そよかぜ文庫）

・聞き手をつかむ迫力ある絵である。ロマンティックで面白い作品。

●『まさ夢いちじく』オールズパーク／絵と文 村上春樹／訳 河出書房新社 1994

（読み手：そよかぜ文庫）

・セピアだけのおしゃれな絵本である。村上春樹の訳は読みやすい。シニカルで、人生の機微をとらえている。ちょっと大きな人向け。冒頭に主人公が出てきてすぐに動くので、話に入っていくやすい。

●『ふうせんばたけのひみつ』 ジャーディン・レ
-ノ／文 マーク・ピナー／絵 山内智恵子／訳
徳間書店 1998（読み手：そよかぜ文庫）

・いかにもアメリカ的で、発想がすごい。ふうせん畑の絵は圧巻。



・色使いが少なく地味ながら読み継がれている絵本を紹介する。

『サリーのこけももつみ』『ハーモニカのめい
じんレンティル』『100まんびきのねこ』『ベ
ンのトランペット』『いたずらきかんしゃちゅ
うちゅう』『かもさんおとおり』『もりのなか』
『ふしぎな500のぼうし』『うさぎのみみはな
ぜながい』『はなをくんくん』

●『ベンのトランペット』レイチェル・イザ
ドラ／作・絵 谷川俊太郎／訳 あかね書房
1981（読み手：講師）

・ベン少年は、近くのクラブのトランペッターにあこがれている。ややぶっきらぼうな訳がぴったりで、なんともすてきな結末が魅力。このトランペッターのようなカッコいい男性は日本の作品にはなかなか出てこない。

・『はなをくんくん』は抒情をもって、雪の中を走る動物たちが生き生きと描かれている。言葉は口にのせて心地よい。

・「お話の長いものは大きい子に向く」から、選書の幅を広げ、絵が語り、大人も味わうことができる絵本を選ぶ。子どもの心を弾ませてくれるか、楽しかったという思いを残せるかが、読み聞かせには一番大切である。読み方は基本を学んで練習すれば誰でも上手になる。どの作品を選ぶかが難しい。それには、

たくさんの本（一般書・児童書の両方）を読むことがまず必要である。

・読み聞かせに必要な姿勢

子どもが好き、絵本が好き、本を読むのが好き（「活字」に信頼と愛着があるか）。また、人生経験を積めば、想像できることが増えてゆく。読み手としての奥ゆきができる。子どもと作品に真剣に向かい合うこと。くすぐっておもねって、笑いをとるようなことはしない。それは子どもや作品に対して失礼である。

●「のはな」（朗読：講師）

はなののはな はなのななあに・・・

（谷川俊太郎『ことばあそびうた』より）

・「ぼくは、美しい日本語を、そこに、一個の物のように存在させることを目指しているんですけれど」（朝日新聞 2009.11.25 より）

・聞いただけで楽しくなる詩である。大人も子供も言葉のグルメになって、マズイ物を食べないようにしたい。解釈ではなく、詩の美しさ、面白さをもっと伝える。

●「どこのどなた」（朗読：講師）

トイレのスイセン ベランダのラベンダー
うんそうやのハコベ・・・

（まどみちお『地球の用事』JULA 出版局より）

・どんなに言葉を食べさせても食べ過ぎはないしお腹も壊さない。おいしい言葉はリピートしたくなりどんどん食べたくなる。それが増えると理解できること、想像できることも増え、生きることが楽しくなるのではないかと。

・子どもが手を伸ばせば楽しい本に届く、学校図書館の整備が急務である。

・読み手をいちばん鍛えてくれるのは、子どもたちという厳しく手強い聞き手。誠意を持って臨みたい。そして、絵本がどう読まれたがっているかを感じとり、楽しみながら読み聞かせを続けていこう。

●「橋をわたるとき」（朗読：講師）

（『地球よ』新川和江詩集 岩崎書店より）

配布資料:「読み聞かせ講座～読みなおすベーシック絵本～」229冊の絵本リスト